

第2節 連続耕作の水田跡にともなう「擬似畦畔B」について

「擬似畦畔B」は、富沢遺跡における水田跡調査の初期段階であった、1982年実施の第5次調査頃より着目されていたが、その呼称及び定義付けが正式に提唱されたのは、1987年刊行の富沢遺跡第15次調査報告書（斎野：1987b）段階であった。着目時から15年を経た現在では、「擬似畦畔B」の検出例は富沢遺跡はもとより、新に発見された仙台市域の水田跡においても類例が増加している。この間、1990年に「擬似畦畔B」の畦畔との関係より、「擬似畦畔B」の特徴と活用方法がa～fの6項目提示されている（仙台農耕文化勉強会：1990）。

現在まで、擬似畦畔Bとは「C₁層水田の畦畔の直下に認められるC₂層上面の畦畔状の高まり」（斎野：1987b）と定義されている（第49図）。この場合のC₁層とは水田土壌（耕作土）で、C₂層とはその直下層をさしており、C₂層は自然堆積層であることを前提としている。従って、擬似畦畔Bの認定に関しては、C₂層が自然堆積層という限定条件が付けられているのである。

今回ここで取り扱おうとしているものは、C₂層が自然堆積層ではなく水田土壌である場合、すなわち、水田耕作土の直下層も水田耕作土で、この直下層上面で検出された畦畔状の高まりを如何に理解するかという、連続耕作の水田跡における擬似畦畔Bの有無についてである。

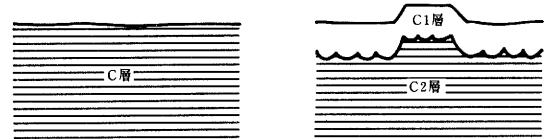
これまで、一般的に連続耕作の水田跡が検出された場合、それぞれの水田跡上面で検出された畦畔状の高まりは、それぞれの水田跡に伴う畦畔と認識し、報告されてきた。果たして全てが全てそうであろうか。例えば、水田跡調査の際に、耕地整理後の現在の水田の直下層に、これより古い時代の水田土壌が存在する場合、その水田土壌の上面で、現代の畦畔の直下に、畦畔状の高まりが残されていることを往々として目にすることがある。これは明らかに、現代の水田の影響によって作られた擬似畦畔Bである。時代の新しい例ではあるが、C₂層が水田土壌であっても擬似畦畔Bが残されるのである。このような観点より富沢遺跡では、1988年以降、連続耕作における水田跡の擬似畦畔B存在について、水田調査に伴う一つの命題として検討が加えられてきたが、蓄積資料の不備とそのメカニズムの複雑さのために、連続耕作における畦畔と擬似畦畔Bとの判別を示すことができなかった。第86次調査では、この判別を提示することが可能な擬似畦畔Bの資料が得られた。そこで、これにこれまでの富沢遺跡の調査例を加え、明らかに水田土壌上面で畦畔と分離され、擬似畦畔Bとして認定し得るI～IIIの3タイプを模式図（第50図）を使い紹介する。

I タイプ：中間の水田土壌が帯状にのみ存在するもの

第50図1の2層水田と3層水田との関係で、帯状に残された3層水田土壌が、2層水田段階の擬似畦畔Bとなる。場合によっては、帯状部分以外にも、薄く断片的に3層水田土壌が残る。2層水田の畦畔が残存する場合には、当然、その直下に認められる。このIタイプ例は、第86次試掘区19TF3b層水田跡とF3c層との関係（卷頭写真3-1）、第28次1層水田と2層との関係（佐藤：1988）、第60次6層水田跡と7層水田跡との関係（平間：1991）、第81次4層水田跡と5層水田跡との関係（佐藤：1993a）等が上げられる。^{註1}

II タイプ：検出畦畔が、直下層水田土壌との混在層のもの

第50図2の2層水田と3・4層水田との関係で、3・4層の水田土壌によって形成された畦畔が、2層水田段階の擬似畦畔Bとなる。この擬似畦畔Bの特徴としては、畦畔を境として一方の区画が3層水田土壌、他方の区画が4層水田土壌となる。これは3層水田の耕作深度（第1段階a）あるいは、3層水田跡以前の地形勾配（第1段階b）に起因すると考えられる。2層水田の畦畔が残存する場合には、当然、その直下に認められる。なお、3層水田の畦畔は、同一箇所に位置していたことが推測される。このIIタイプ例は、第86次試掘区19TF4層水田跡とF5



斎野：1987bの第35図(P.91)を加筆・修正

第49図 擬似畦畔B

- ・ 6層水田跡との関係^{註3}（巻頭写真3-2）、第52次1層水田と2・3・4層との関係（中富：1990a）、第58次3層と4a・4b層水田跡との関係、4a層水田跡と4b層水田跡・5層・6層との関係^{註4}（佐藤：1991）、第75次3a層水田跡と3b層水田跡・4a層との関係（渡部：1992b）等が上げられる。

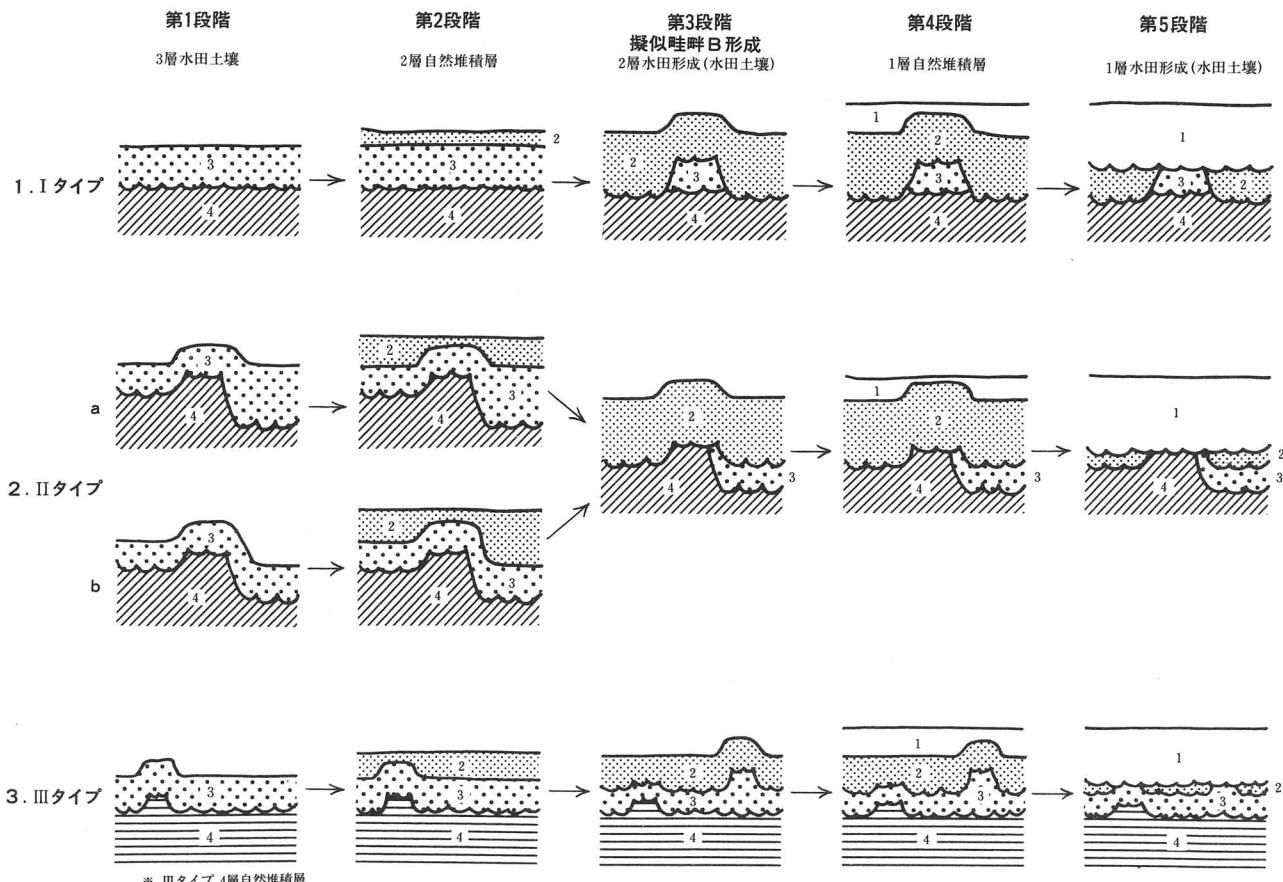
Ⅲタイプ：複数の検出畦畔が区画を形成しないような位置関係にあり、その内、直下層（自然堆積層）に擬似畦畔Bが検出されないもの

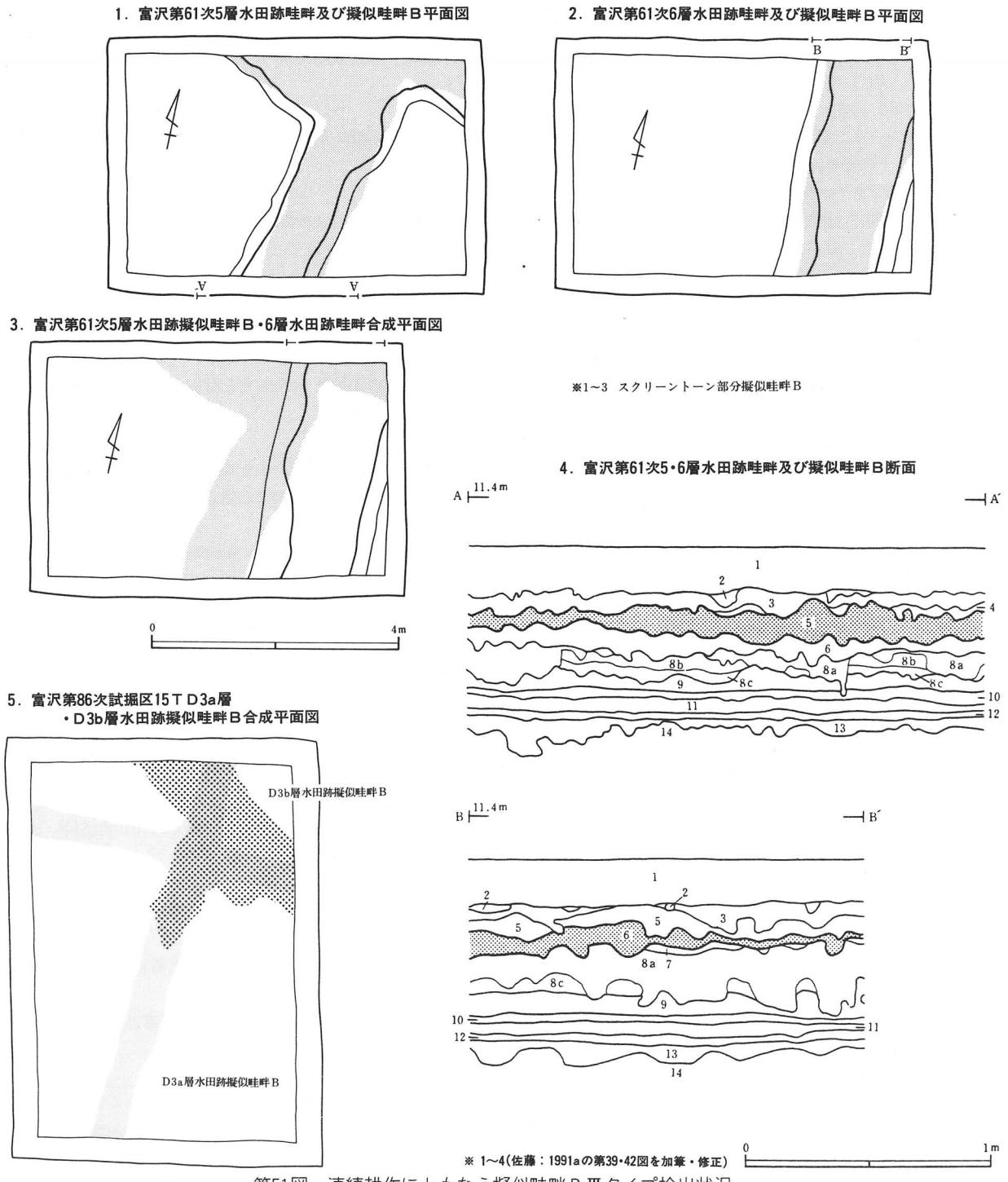
第50図3の2層水田と3層水田との関係で、4層上面に擬似畦畔Bが形成されない3層上面の畦畔が、2層水田跡段階の擬似畦畔Bとなる。この場合、本来の3層水田跡畦畔と区画を形成しない位置関係であることが、必要不可欠条件となる（第51図3・5）。このⅢタイプ例は、第61次5層水田跡と6層水田跡との関係（第51図1～4、佐藤：1991a）、第86次試掘区15TD3a層水田跡とD3b層水田跡との関係^{註5}（第51図5、巻頭写真3-3）等があげられる。

以上のように、擬似畦畔Bは自然堆積層のみならず、水田土壤上面にも形成されることが判る。水田土壤上面に残される擬似畦畔Bの形成は、そのメカニズムが複雑で、ここで例示した、I～IIIの3タイプは、ほんの一例に過ぎない。その判別には、該当層の上下層の断面観察のみでは不十分で、それ以上の上下層にわたる断面観察はもとより、各層の成因、地形との関わり、平面的な位置関係、形成過程の把握等の各要素を絡めた総合的な見地の上に立ち、進めていかなければならないと考える。

註1：いずれの各層も水田土壤の可能性が高いことが指摘されている。

註2：第60次の報文では、6層水田跡の擬似畦畔Bとはせず、7層水田跡の畦畔としている。6層水田跡上面では、擬似畦畔Bとは異なる位置の畦畔が報告されており、これは5層水田跡の擬似畦畔Bと判断される。





第51図 連続耕作にともなう擬似畦畔B IIIタイプ検出状況

註3：報文発表後、いずれの各層も層位の対応関係によって、水田土壌であることが明らかにされている（佐藤：1991b）。

註4：第58次の報文では、それぞれ3層、4a層水田跡の擬似畦畔Bとはせず、それぞれ4a層水田跡、4b層水田跡の畦畔としている。

註5：第86次では、D3b層水田跡の直下層D4層が自然堆積層ではなく、水田土壌であったが、両水田跡とも畦畔・擬似畦畔Bが確認されており、一応このタイプに加えた。なお、D3b層水田跡の畦畔は、平面的に捕えることを逸したため、第51図5の合成平面図には擬似畦畔Bを使用した。

第I～Ⅲ章 引用・参考文献

- 太田昭夫 1991「第2章 遺跡の位置と環境」『富沢遺跡第30次発掘調査報告書－第1分冊縄文時代～近世－』仙台市文化財調査報告書第149集 仙台市教育委員会
- 経済企画庁 1967『地形・表層地質・土じょう 仙台』
- 斎野裕彦 1987a「第2章第2節 富沢遺跡とその周辺の歴史的環境」『富沢－富沢遺跡 第15次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 斎野裕彦 1987b「第7章第1節2. 水田跡について」 同上
- 佐藤甲二 1988『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1989「第2章第11節 富沢遺跡第46次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1991a「第2章第5節 富沢遺跡第61次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1991b「第4章 富沢地区基本層序案・層位対応関係案」 同上
- 佐藤甲二 1993a「第2章第3節 富沢遺跡第81次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（5）』仙台市文化財調査報告書第171集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1993b「第2章第5節 富沢遺跡第83次調査」 同上
- 佐藤甲二 1994「第2章 富沢遺跡第87次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（7）』仙台市文化財調査報告書第184集 仙台市教育委員会
- 佐藤 洋 1991「第2章第1節 富沢遺跡第58次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会
- 庄子貞夫・山田一郎 1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 仙台市農耕文化勉強会 1990「水田跡の基本的理－仙台市における水田跡の検出と認定－」『第3回東日本の水田跡を考える会－資料集－』東日本の水田跡を考える会
- 田中則和 1984「1・4. 立地と歴史的環境」『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集 仙台市教育委員会
- 豊島正幸 1987「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 豊島正幸 1988「II. 3) 流路跡の分布状態と微地形」『富沢遺跡－24次調査富沢中学校地区発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第113集 仙台市教育委員会
- 中富 洋 1990a「第2章第3節 富沢遺跡第52次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（2）』仙台市文化財調査報告書第135集 仙台市教育委員会
- 中富 洋 1990b「第2章第5節 富沢遺跡第54次調査」 同上
- 中富 洋 1991「第2章第9節 富沢遺跡第65次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会
- 平間亮輔 1991「第2章第4節 富沢遺跡第60次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会
- 藤原宏志・佐々木章・侯野敏子 1989「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』第21号 日本文化財科学会
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51
- 町田 洋・福沢仁之 1996「湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代」『日本第四紀学会講演要旨集』日本第四紀学会
- 山田一郎・庄子貞雄 1987「第9章 富沢遺跡の下部火山灰と第15次調査32a層の土壤」『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 山田一郎・庄子貞雄 1988「第IV章3. 富沢遺跡第28次調査の土壤と火山灰」『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集 仙台市教育委員会
- 山田一郎 1989「VII. 5. 富沢水田遺跡の十和田－中折テフラ」『富沢・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書I－』仙台市文化財調査報告書第127集 仙台市教育委員会
- 結城慎一 1990「カマド塚について」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論功』伊東信雄先生追悼論文集刊行会編
- 吉岡恭平 1987「第7章第4節5. (5) VII区の調査」『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 吉岡恭平 1989「VI 鳥居原地区」『富沢・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書I－』仙台市文化財調査報告書第127集 仙台市教育委員会
- 渡部弘美 1992a「第2章第3節 富沢遺跡第72次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（4）』仙台市文化財調査報告書第163集 仙台市教育委員会
- 渡部弘美 1992b「第2章第6節 富沢遺跡第75次調査」 同上